

令和3年度学校経営報告

東京都立小松川高等学校長 勝 嶋 憲 子

1 今年度の取組と自己評価

(1) 教育活動への取組と自己評価

【自己評価の基準】 A:十分達成できた B:概ね達成できた
C:あまり達成できなかった D:全く達成できなかった

ア 学習指導 達成度B

<目標> 「授業で勝負」を合言葉とし、質の高い学習指導に向けての授業改善を推進する。

<方策>

- ① 新学習指導要領の理念を全教員で再確認し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて授業改善に取り組む。生徒の思考力育成に向けて、考えさせる発問やアウトプット（書く、話す、話し合う、発表する）を積極的に取り入れる。
- ② 課題、補習、小テスト等により基礎・基本の定着を図る。学習課題については内容の精選と教科間での調整を通して、生徒の「やらされ感」を軽減するようにする。
- ③ 教科内での教材の共有化を進め、定期考査の共通化（公民）を完成させる。
- ④ 全学年で実施される「総合的な探究の時間」の理念と指導法を全教員で共有し、PDCAマネジメントサイクルを通して質の高い内容に仕上げていく。
- ⑤ 2年次の「課題研究」において、1・3学年の担任を除く、全教員（管理職、非常勤教員、JETを含む）で指導にあたる。
- ⑥ 年2回の「授業見せ合い月間」や生徒による授業評価を活用し、教科ごとに授業改善に取り組む。
- ⑦ 英語の4技能をバランスよく育成するために、CAN-DOリストを中心として、本校の英語教育のスタンダードを確立し、英語教育推進校としての役割を果たしていく。
- ⑧ デジタル技術を活用した教育の推進を図るため、ICT環境の利活用として、無線LAN（Wi-Fi）の利用や、「Microsoft Office 365」（Teams等）を全学年で活用する。
- ⑨ 図書館へ複数配布される新聞紙や「総合的な探究の時間」を活用し主権者教育及び消費者教育を推進する。
- ⑩ 図書館、学年、教科の連携を通して、生徒の読書活動を推進する。

<取組・自己評価>

- ① 多くの授業でペア学習やグループ学習を通じた話し合いの時間が取り入れられていて、自分の考えを発表する機会も設けている。また、「総合的な探究の時間」を始め、教室内や学年単位でのプレゼンテーション等の機会も増加した。調べたことを廊下に展示するなど、成果の見える化も進んでいる。
- ② 学年ごとに教科間の課題量の調整を進めた。「学習課題は進路実現に役立つか」の肯定回答が70%（昨年度79%）であり、課題に対する生徒の意識は肯定的であるが、学年が課題量を調整する必要がある。
- ③ 考査の共通化は国語、地歴公民、数学、理科、英語、保健で100%、公民はまだであるが、ほぼ完成した。
- ④ 「総合的な探究の時間」では、探究部が中心となり1・2学年において、毎時間の授業案とワークシートにより、「探究入門」「進路探究」「理数探究」「国際理解探究」を実施した。いずれの内容も質が高く本校の特色となっている。
- ⑤ 2年次の「課題研究」は、全教員がコーディネーターとして関わって指導、生徒全員が中間発表と本発表Ⅰを実施し、最終レポートの提出も達成した。本発表Ⅱは、コロナ禍のため「Teams」で全教室に配信した。
- ⑥ 「見せ合い月間」を活用し、互いの授業を積極的に観察し意見交換を実施した。中には、他教科の授業参観により新たな視点を見つけた教員もいる。
- ⑦ 1、2年はGTECを全員受験し、学年を追うごとに4技能がバランスよく伸びている結果となった。英語検定は校内申し込みを通して、延べ398人が受検した。また、CAN-DOリストに基づき、学期毎にスピーキングテストやパフォーマンステストを実施した。1学年が4月にはTOKYOグローバルゲートウェイ（TGG）で半日研修も行った。
- ⑧ ICT教育を促進し、デジタルサポーターの支援によって「Teams」による連絡事項・課題配信・オンライン授業等で全学年が活用した。教務部が「定期考査採点・分析システム」の試行を3月に実施し、さらに「一人1台端末」の実施要項等の作成と「統合型校務支援システム」の準備を進めている。
- ⑨ 全国紙6紙を図書館と廊下にそれぞれ配置し、授業を通して新聞活用を進めた。
- ⑩ 授業、探究学習での図書館利用も多く、資料の生徒貸出数は一日平均19.4冊（昨年度13.0冊）と増加した。朝日新聞記事データベース「朝日けんさくくん」のトライアルを行い、来年度から導入した。また、蔵書検索については(株)カーリルの「Covid-19学校図書館支援プログラム」の無償プログラムを受け、スマホやタブレットから検索できるようになった。

イ 進路指導 達成度A

<目標> 進学指導特別推進校として、本校独自の進路指導計画「ウィンズプロジェクト」を核とし、入学時

点から3年間を見通した小松川の進路指導を進路指導部が中心となって推進し、塾・予備校に頼らず、高い目標を持たせた生徒の進路実現につなげる。

<方策>

- ① 進学指導特別推進校として、改善すべきことは東大を含め旧7帝大、東工大、一橋大、国公立大医学部合格者の人数を10人以上（昨年度6人）に増やしていく。そのためには、在校生と卒業生から、東大と国公立大医学部の合格者を出す。（難関国公立大学の合格者数の増加を目指す。）
- ② 入学時から生徒と保護者に東大を含め旧7帝大、東工大、一橋大、国公立大医学部の難関大の魅力や良さを情報提供し、目標となるように進路部が中心となって、生徒・教師・保護者とともに学校の雰囲気醸成していく。
- ③ 新2年生から、2年の12月に高い志望を持たせるための「第一志望宣言」を提出させる。
- ④ 大学入学共通テスト、英語外部認定試験、総合型選抜及び学校推薦型選抜、調査書の電子化に向けて、確実な対応を組織的に情報の共有化を図る。
- ⑤ e-ポートフォリオを効果的に活用するために教員研修を定期的実施する。
- ⑥ 模試結果データに基づいた資料を活用し、最後まであきらめさせない指導を行う。模試分析会に、学年及び教科担当が悉皆で参加し分析を行い、生徒に情報の還元をする。特に3年生ではケース会議を年2回行い、出願指導等に活用する。
- ⑦ 進路行事への保護者参加や三者面談の実施を通して保護者と連携した進路指導を展開する。
- ⑧ 長期休業期間中の講習について、予備校や塾に頼らないことを前提にして、計画・実施する。
- ⑨ 「何のために学ぶのか」という学習の意義を生徒間で共有させ、家庭学習を一層促す。
- ⑩ 自主学習を支援するため、放課後に自習できる環境（教室・コマホール）を保証する。
- ⑪ オリンピック・パラリンピック教育を実践し、東京2020大会以降のレガシー構築を見据えて、多様性を尊重する態度を育てる。

<取組・自己評価>

- ① 旧7帝大、東工大、一橋大の合格者人数は、7人（昨年度6人）であった。国公立大合格者が、86名（昨年度66名）と大幅に増加した。
- ② 生徒と保護者に東大を含め旧7帝大、東工大、一橋大の難関大の魅力や良さを知ってもらうために1学年生徒に東北大学、2学年生徒及び保護者には名古屋大学のリモートによる大学説明会を実施した。
- ③ 2学年の12月に高い志望を持たせるための「第一志望宣言」を保護者にも確認していただいた。生徒・教員・保護者の共通理解のもと、高い目標をもって3学年0学期から大学受験を意識させることができた。
- ④ 進路通信「時計台」を2回発行し、進路情報として「進路のパズル」を2回発行し必要な進路情報を生徒・保護者・教員に情報共有に努めた。
- ⑤ e-ポートフォリオの校内研修会は実施出来なかったが、生徒の活用は進めている。特にe-ポートフォリオの「Classi」から「Teams」への移行も完了した。
- ⑥ スタディサポート、ベネッセ6月、7月、9月、10月進研模試分析会、河合塾第2回全統記述模試分析会を1・2学年合同で実施した。3学年はケース会議を3回実施、最後まであきらめさせない指導を行った。
- ⑦ 1月の「保護者のための進路ガイダンス」は、講師を招聘し、対面講演会とYouTubeで実施した。三者面談については、3学年において夏期休業中と2学期に全員悉皆で実施することができた。
- ⑧ 夏期講習75講座（3年50、2年12、1年13）を実施し、申込者は延べ2,540人であった。2年生対象のウインターセミナーは実施し、87名参加した。
- ⑨ 入学直後のスプリングセミナーは、学校で1日実施し、「学ぶ意義」について理解させ学習へのモチベーション向上につなげることができた。
- ⑩ コマホール（自習室）を19時まで開室し特に3学年の自主学習を支援した。2学年の活用が進んでいる。
- ⑪ 国際理解探究として、3学期に「総合的な探究の時間」に夢ナビ動画の中から国際関係学に関する動画を視聴し、それをもとに8時間かけて探究活動を行った。

ウ 生活指導・健康教育 達成度B

<目標> 社会人としての規範意識を身に付けた人間性豊かな生徒の育成を目指す。また、生徒が安心して充実した学校生活を送れるよう学習環境を整備する。

<方策>

- ① 「時を守り、場を清め、礼を尽くす」を指導方針とし、全教員による一致した生活指導を行い、社会人としての規範意識を身に付けさせる。チャイム始業の徹底はこれまで通り継続する。
- ② 時間厳守の基本である登校時間について、予鈴までの登校を徹底し、生徒の遅刻防止につなげる。

- ③ 計画的・継続的な服装・頭髪指導等の身だしなみや校内外での挨拶励行の指導を継続する。
- ④ 交通ルールの遵守と自転車事故防止に向けた交通安全指導を行う。また、登下校時のマナーやSNSに関するモラルに関する指導も継続していく。
- ⑤ 体罰の禁止・根絶についての未然防止・早期発見・早期対応を図る。
- ⑥ 毎月の教育相談連絡会を活用し、生徒の長期欠席やいじめを未然防止する。
- ⑦ 誰も自殺に追い込まれることのないよう、SOSを出しやすい環境を作る。
- ⑧ 校内美化活動、ごみの分別、リサイクル活動の充実を図る。
- ⑨ 授業日の登下校時以外は校門を閉鎖し、生徒の安全・安心に努める。

<取組・自己評価>

- ① チャイム始業は当たり前のようにできている。部活動延長時の下校時刻ルールや活動場所の美化が遵守できているとは言えず改善の必要がある。
- ② 生活指導部が毎朝校門に立ち、予鈴までの登校を徹底した。担任との連携により遅刻者が減少している。
- ③ 服装や挨拶指導において、教員による温度差が大きい。全教員が同じ目線で行う必要がある。
- ④ 自転車事故が複数回発生し、放送やHRによる注意喚起を繰り返した。未然防止に向けて指導を徹底していく必要がある。SNSに関するモラルに関する指導は、継続していく必要がある。
- ⑤ 体罰の禁止・根絶については、未然防止・早期発見・早期対応を図ることができた。
- ⑥⑦ 毎月1回の教育相談連絡会で生徒情報の共有を図った。スクールカウンセラーによる教員へのアドバイスが大変有意義であり、長期欠席の未然防止に繋がる。
- ⑧ ごみ分別等を保健委員の生徒が主体的に呼びかけられるようになった。生徒の意識も高く、分別、リサイクル共に良好である。新型コロナウイルス感染症予防のため、ティッシュやマスクの持ち帰りをさせた。
- ⑨ 防犯の観点から授業時間帯は校門を閉鎖した。

エ 特別活動・体力向上 達成度A

<目標> 特別活動での取組みを通して、人間として成長させる。

「本物を見る・本物に触れる」ことを通して、知的好奇心を引き出し能動的な学習につなげる。

<方策>

- ① 学校行事全体の活性化を進め、全校生徒の成就感や達成感を高める。
- ② 海外修学旅行の事前準備を新学年と探究部が中心となって計画し、令和5年度に実施する。
- ③ 部活動は学習との両立を基本とし、合理的かつ効率的に実施する。また、地域貢献ボランティア活動「1部活動一善運動」に取り組む。
- ④ 海外学校間交流推進校として、海外の高校生との交流活動の機会を増やす。探究部が、3月に語学研修のため、留学生との交流もできる立命館アジア太平洋大学訪問の希望者を募って実施する。
- ⑤ 理数研究校として、校内・校外での本物体験を推奨し、科学の甲子園やコンテスト等へも参加する。
- ⑥ 年4回の避難訓練、防災訓練、生徒による防災支援隊を通して、自助・共助の意識を高める。地域の町会からも積極的に参加していただき、地域との連携をより強化した防災教育を実践する。
- ⑦ 体育の授業や部活動を通して体力向上を図る。体力テストにおいて、すべての学年で全国平均以上となるようにする。
- ⑧ スポーツ特別強化校として全国大会の上位入賞を目指し、さらにボート部の競技力向上を図る。

<取組・自己評価>

- ① 体育祭・文化祭・合唱祭では、三大多行事の代替行事を創意工夫により実施した。
- ② コロナ禍のため、1学年の次年度の海外修学旅行は、国内修学旅行（沖縄方面）に変更した。
- ③ コロナ禍においても「1部活動一善運動」では、5部の部活動（昨年度は19）が地域貢献活動を実践した。
- ④ 海外学校間交流推進校指定の4年目である。オーストラリアのAberfoyle Park High Schoolと定期的にビデオチャットや手紙のやり取りを行った。有志生徒によるKGT（Komatsugawa Global Team）の活動を今年度も継続した。KGT NEWSの発行などを通して、他の生徒の国際理解を深めた。
- ⑤ 理数研究校指定の4年目であり、博物館・民間研究所・理化学研究所などの施設見学等は、ほとんど中止となった。しかし、大学教授による実験講習会や防災科学技術研究所の研究員による講演会などを実施し、延べ82名が参加した。参加した生徒の満足度は高く、意識変容に至っている。
- ⑥ 防災訓練では2回は教員の役割分担を決めて地震対応、また、水害を視野に入れた訓練、火災対応の避難行動訓練、江戸川消防署小松川出張所所長の講話と1学年を対象に火災発生を想定しての訓練を実施した。
- ⑦ 部活動加入率は95.3%（昨年度95.2%）である。体力テストでは、全ての学年で男女共に東京都平均を上回った。また、女子は3学年ともに全国平均を超えた。全ての学年で、全国平均値を上回った。

令和2年度体力テストの結果

◎：全国平均以上 ○：東京都平均以上

	1年男	2年男	3年男	1年女	2年女	3年女
体力合計点 (昨年度)	50.6 ○ (50.0 ○)	56.0 ○ (55.5 ○)	58.6 ○ (57.2 ○)	50.0 ◎ (51.9 ○)	55.9 ◎ (54.0 ◎)	56.5 ◎ (55.2 ◎)

- ⑧ ボート部は、インターハイ出場で女子舵手付きクォドルプル準優勝、関東高等学校選抜ボート大会で女子クォドルプル準優勝を果たした。

オ 募集・広報活動 達成度 B

<目標> 本年度は、中学校卒業予定者数増に伴い募集・広報活動の工夫・改善により、応募倍率の向上のため重点的に取り組む。

<方策>

- ① 本校の特色ある教育活動の魅力を伝えられるよう全教職員で共通理解し、広報活動に取り組む。
- ② ホームページは、生徒の活躍（学習、行事、部活動等）をタイムリーに学校ホームページに掲載し、日常の学校生活の情報提供に努める。
- ③ 新入生・中学生・保護者等のアンケート結果を分析し、効果的で効率的な募集・広報活動に向けて改善を図る。
- ④ 重点的に学習塾等への訪問をとおして本校の特色ある教育活動を伝え、募集・広報活動を推進する。

<取組・自己評価>

- ①②学校案内の配色をコマメリノの色を基調として、小松川高校のイメージに合った明るい雰囲気にした。
学校見学会、説明会、小松川フェスタをコロナ感染症予防対策のため全て事前のオンライン予約制で実施し、参加者が把握できたため丁寧な対応ができた。年間参加者は、見学会合計6回1,510名、フェスタ538名、授業公開3回549名、学校説明会665名、部活動見学・体験145名、体験授業3回193名、東京都合同説明会72名、個別相談会4回184名、外部説明会369名、総計4,225名(昨年度比150% 2,818名)が参加した。PTA主催の学校紹介展示を行い細やかな情報を伝えることができた。生徒会生徒作成の校内MAPや制服見本展示も好評だった。
- ③ 夏の学校見学会では庶務委員の生徒が中学生等を案内し、非常に好評であった。学校の良さを理解していただくために、生徒をもっと前面に出すようにしたい。
- ④ 新しいホームページは、ほぼ毎日、ニュースにおいて、学校生活の様子や部活動を中心に発信した。

カ 学校運営・組織体制 達成度 B

<目標> PDCAマネジメントサイクルを活用した学校運営を推進する。

<方策>

- ① 「Microsoft Office 365」(Teams等)を利用し、ペーパーレスも兼ねた職員会議を開催する。
- ② ライフ・ワーク・バランスの実現に向けて、校務を効率化し、月2回以上の定時退勤を徹底する。
部活動指導員・外部指導員の活用、会議時間の短縮、およびICTの有効活用を進め、働き方改革につなげる。
- ③ 「チーム小松川」として、協力して新しい時代の学校を創り上げていく職場環境作りを進める。
- ④ 探究部を中心として、学校が直面する課題をとりまとめ、全教員で校内研修を行う。
- ⑤ すべての分掌・学年・教科が年度当初に組織目標を定め、中間報告、年度末総括を行う。
- ⑥ より良い学習環境に向け施設・設備の管理・保全と迅速な補修に努め特別教室の冷房化を推進する。
- ⑦ 経営企画室において、経営参画ガイドラインを活用して、資質・能力と経営参画意識の向上を図る。

<取組・自己評価>

- ① 資料で確認の方が効果的と思われ、ペーパーレスも兼ねた職員会議を開催することができなかった。
- ② 部活動指導員を10名(昨年度9名)配置でき、活用が進んだ。超過勤務の教員数は昨年度より減少したが、会議時間の短縮や定時退勤の徹底には至らなかった。
- ③ 日々のメールでの連絡が効果的に機能している。探究部の3名から4名の増員に至った。
- ④ 校内研修会は「Teamsの操作方法等」の研修を全員で実施し、全教員に方法等について周知を図った。
- ⑤ 年度当初の組織目標設定、中間報告、年度末総括を通して、課題等を全教員で共有する流れができていく。
- ⑥ トイレの洋式化率は90%を超えた。生徒の要望に応え、冷水機、自動販売機2台を増設し1台は食品用とした。自販機の中身も考慮された。特別教室の空調については、令和3年度に設計を実施し、令和4年度の工事を予定している。新設対象教室【物理実験室 化学実験室 生物実験室 調理室 被服室 美術室 書道室 地学室】プラスで、【ともづる 和室】となる。
- ⑦ 行政系職員の意識が高く、学校全体を支える組織になっている。昨年度の体育館の冷房化も順調である。チャレンジ雇用も定着した。

(2) 重点目標と方策(数値目標)

ア 生徒の学校に対する満足度(学校評価アンケートにおける肯定割合)

項 目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
① 学校生活の満足度	90%以上	90.0% (90.0 90.7)	A
② 進路実現に向けての授業の満足度	80%以上	80.0% (75.0 82.6)	A
③ 講習・補習への満足度	90%以上	87.0% (88.0 90.0)	B
④ 三大学校行事に対する満足度(代替行事)	85%以上	77.0% (71.0 87.0)	B

「この学校に入学してよかった」に対する肯定割合も生徒90%、保護者95%と高い。

イ 生徒の希望進路の実現

項 目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
① 国公立大学合格者数(現役のみ)	70名以上	86名(66 54)	A
② 早・慶・上智・理科大合格者数(現役のみ)	80名以上	69名(45 40)	B
③ 学習院・明治・青山・立教・中央・法政大合格者数(現役のみ)	200名以上	272名(278 161)	A
④ 現役進学率	90%以上	92.7%(91.7 90.0)	A

ウ 大学入試センター試験の結果

項 目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
① 大学入試センター試験出願率	95%以上	99.4%(99.4 99.4)	A
② 5(6)教科7科目型の受験者	120名以上	146名(127 117)	A
③ 80%以上の得点者が受験者の半数以上の科目	5科目以上	2科目(3 2)	C

エ 授業改善に向けた校内研修の実施

項 目	目標値	今年度(昨年度)	達成度
授業に対する校内研修(授業の見せ合い)への参加率	100%	100%(100 100)	A

オ 応募倍率の向上

項 目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度
推薦選抜応募倍率(男女平均)	3.5倍	2.62倍(3.38 2.52)	B
学力選抜応募倍率(男女平均)	1.5倍	1.38倍(1.43 1.45)	B

カ 文武両道の実現

項 目	目標値	今年度(昨年度、一昨年度)	達成度	
① 家庭学習時間 (学年+1時間)	1学年(2時間以上)	120分	平日89分(165 72) 休日135分	B
	2学年(3時間以上)	180分	平日97分(170 94) 休日138分	B
② 勉強と部活動との両立に対する肯定割合	75%以上	65.0%(64.0 71.0)	C	
③ 遅刻者数(学校全体の1日平均)	3人以下	3.9人(3.51 4.71)	B	

① 昨年度から集計方法を変更したので、昨年度との比較のみである。数値は1月の結果である。

2 次年度以降の課題と対応策

- ① 昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症防止対策の対応ため、ICT化の利用の効果が大きかった。今後も生徒への理解を促進し、「Teams」の一層の工夫と努力を重ねて、新1年生の「一人1台端末」の活用も含めて、更なる上を目指すべきである。また、新学習指導要領の理念を踏まえて「観点別評価」について、全教員で再確認し、学校全体としての共通理解と保護者説明ができるようまとめていく必要がある。
- ② 今年度の進路結果を分析し、課題を明確にする。進路指導部を中心とした進路指導を通して、より組織的な進路指導を実現する。また、保護者会(学期に1回)、二者面談、三者面談、「保護者のための進路ガイダンス」、個別進路相談窓口等を開設し、保護者に対して幅広い進路情報の提供を行い、進路意識を高めていく。
- ③ 「大学入学共通テスト」対策については、学校全体として各教科で分析も含めて取り組む必要がある。
- ④ 挨拶、身だしなみ、時間厳守等の指導を継続する。特に、部活動延長時の下校時間厳守を徹底する。
- ⑤ 今年度2回目の探究学習の「課題研究」を本格的に展開するように実施した結果、明らかに生徒の内面のウイングは広がり、教科学習、進路学習、行事や部活動などの学校生活を生徒自身が主体的に創っていくという面で、21世紀の教育が求められている力を涵養しています。そのため、今後も全教員体制で取り組む。
- ⑥ 来年度は、ますます本校の特色ある教育活動を教職員で共通理解し、より効果的な募集活動を行う。また、ホームページを活用し、日々、情報発信を実施する体制を構築する。